

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520332

研究課題名(和文) 古代ロシア文語成立の萌芽期におけるブルガリア写本テキストの影響について

研究課題名(英文) Research on the influence of Bulgarian manuscripts on the formation of the Old Russian literary language in its embryonic stage

研究代表者

岩井 憲幸 (Iwai, Noriyuki)

明治大学・文学部・教授

研究者番号：60193710

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円、(間接経費) 870,000円

研究成果の概要(和文)：『ヴァチカン・パリンプセスト・キリル・アブラコス』と『サバの書』を主対象に上記テーマで研究を行った。『サバの書』本体のみではなく、やや後のロシアやブルガリアの写本をも包含する「とり合わせ本」として1冊のアブラコスをなすコーデクス¹⁴を研究対象とするなど新たな試みも行った。また、『サバの書』を中心に『オストロミール福音書』、『アルハンゲリスク福音書』、『ムスチスラフ福音書』のそれぞれを四福音書での章節順に並べ替えた電子的平行テキストも作製した。最後に報告書(iii+173ページ)を刊行して各位に配布した。

研究成果の概要(英文)：From 2010 through 2013 we did philological research on the influence of Bulgarian manuscripts on the formation of the Old Russian literary language in its embryonic stage, focusing on the Vatican palimpsest cyrillic lectionary and Sava's Book. We also made a computer-based parallel text of the Sava's Book, Ostromir Gospels, Archangel Gospels and Mstislav's Gospels. This research was summarized and published by Iwai from the philological viewpoint.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：古代ロシア文語 古代教会スラブ語 ブルガリア写本

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究課題の標題は、古代ロシア文語成立の萌芽期におけるブルガリア写本テキストの影響についてというものである。この際に、古代教会スラブ語の伝播と各地の中世スラブ語の形成という大局から眺めるとき、四福音書に対するアブラコスと占める元来の位置と、さらには、後にブルガリアやロシアで生じた、数次の地方的な変種の探求は、避けて通れぬ重要な課題である。

なお、アブラコスとは、ラテン語で *evangelarium* (英語では *lectionary* と呼ばれることが多い) と呼ばれる典礼用の福音書の抜粋で、日曜日や祝日などに教会で朗読されるべきテキストを教会暦に従って配列して編んだものである。

(2) そもそも古代ロシア文語とは、9世紀ビュザンティオンのキュリロス、メトディオス兄弟によって制定された古代教会スラブ語 (OCS) が、のちに10~11世紀のルーシ (中世ロシアの地) にもたらされ、それが土地の言語すなわち東スラブ族の日常の言語に強い影響を受けて成立したハイブリッドな文章語だとされる。OCSはキリスト教聖典類の翻訳のために制定され、この言語によって多くの写本が作られたが、オリジナルは一切伝存せず、それらの転写本のみが存し、かつそれぞれが各地域の生きた言語の影響下にあるとされる。(これらを OCS の地方的変種という。) キュリロス・メトディオス兄弟没後、モラビアから追放された弟子たちの多くは、ブルガリアに逃れ、マケドニアさらに東ブルガリアに OCS を伝え、この間何度かの聖典翻訳への改修も試みたと考えられる。そしてルーシの写本は多くがブルガリアに源流を有するとされ、したがってルーシの写本テキストには、OCS の第1世代から受け継いだもののみならず、第2・第3の、特にブルガリア的要素が混入している。しかし当時のブルガリアと東スラブの言語は互いに似かよっていたため、これらを特定することは困難である。だがことに11世紀ブルガリアで成立したと目される『サバの書』が、ルーシのテキストと深い関係があることは、多くの学者によって言及されてきた。筆者らのこれまでの研究に照らしても、ロシア最古の『オストロミール福音書』(1056-1057年) は、OCS の標準テキストに加えてもよい程正調さを有するが、標準テキストの『アッセマーニ写本』(マケドニア、10-11世紀) との関連性を強く感じさせるし、東スラブ語的要素が一部加わったルーシの『アルハンゲリスク福音書』(1092年) は同じ標準テキストの『サバの本』との密接な関連性を感じさせる。ルーシの『ムスチスラブ福音書』(1115年) はこれらを重層化し、さらに東スラブ的要素を深めていったものと図式的には感得される。キュリロス・メトディオスの最初の翻訳はアブラコスであったことは確実であり (『コン

スタンティノス一代記』第14章参照)、上掲『サバの書』以下もすべてアブラコスである。むしろ、キュリロス・メトディオス翻訳のアブラコスとこれらが直線的につながるわけではないが、四福音書よりもアブラコスに重心を置いた視点に筆者らは立脚する。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、当初、次の目的を掲げて着手された。すなわち、古代ロシア文語成立の萌芽期におけるブルガリア写本テキストの影響について、『サバの書』を中心に据えて研究し、ついで、比較研究に資するためにロシアの『オストロミール福音書』、『アルハンゲリスク福音書』、『ムスチスラブ福音書』と、東ブルガリアの『サバの書』、西ブルガリア (マケドニア) の『アッセマーニ写本』との平行テキスト — これまで、存在しなかった — を編集するというものである。

これらの写本は全てアブラコスであるが、研究の背景説明でも述べたように、古代教会スラブ語の伝播と各地の中世スラブ語の形成という大局から眺めるとき、四福音書に対するアブラコスと占める元来の位置と、さらには、後にブルガリアやロシアで生じた、数次の地方的な変種の探求は、避けて通れぬ重要な課題であることを繰り返して強調しておきたい。

(2) 古代ロシア文語における時制の問題 — これはロシア語史上の最大問題のひとつと考えられる —、特にアオリストとインペルフェクトの存否の問題についても、追求する。今回種々の時間・地域差を有する写本テキストの対照研究により、特に両時制間における形態の近似性、さらに両形態の混淆が母音の縮約により主に生起するのではないかと考え、かかる事例の多くを採取してきたが、さらに OCS の標準テキストであるブルガリア写本テキストにおいてすでに出現している例を知るに及び、詳細な平行テキストによる比較・対照研究を行う。さらに過去時制が、アブラコス等の改訂時においていわゆる編集的手法によって、OCS の標準形から、より各地方に適した形態に書きかえられている事実についても、調査の手をひろげる。ここには各地各様のアブラコス等改修の展開を特徴づける重要な鍵がひそんでいると考えるからである。

3. 研究の方法

(1) アブラコス研究の意義と重要性については、すでに強調してきている。1995年度以来の研究の積み重ねにより、たとえば、『アルハンゲリスク福音書』のアブラコスとしての構成 (重要な構成要素たる *synaxarion* や *menologion* について) に関する有益な知見が得られている。それらを活かし、さらに研究を進めるべく、まず、『ヴァチカン・パリンペスト・キリル・アブラコス』、ついで、『サ

バの書』を対象として、synaxarion や menologion について文献学的な考察を行う。その際に、『サバの書』では、従前のように古代教会スラブ語のカノンである『サバの書』本体のみではなく、やや後のロシアやブルガリアで作られた写本をも包含する「とり合わせ本」として全体で1冊のアプラコスをなすコーデクスNo.14 を研究対象とするなどの特徴的な新たな試みを行う。

(2) 『サバの書』は従来 Shchepkin の刊本(1903年、1959年)が研究に用いられてきたが、1999年 Kniazevskaia らにより、テキストの写真とその翻字テキストを完備し、かつ Shchepkin では正されなかった原本の乱丁等が正され、信頼に足るテキストが公刊された。(ただし研究編などは未刊。) しかもいわゆる OCS の標準テキストである『サバの書』部分のみならず、その欠を補うべく前後に添えられたロシア制作等のテキストも含め、現存する1冊の本、コーデクス No. 14 として出版された。画期的事業と評しうる。また、Alekseev らが中心となり、ロシア聖書協会およびロシア科学アカデミーにより、四福音書の『マリア写本』(マケドニア、10-11世紀)を中心として、これに詳細な異文を掲載した、いわばギリシア語新約聖書の Nestle-Aland 刊本のロシア版とも称すべき書が刊行されだした。(「ヨハネ伝」1998年、「マタイ伝」2005年の2冊のみ刊行済み。) このシリーズは待望の書ではあったが、ロシア聖書学の経験不足と、不統一性が散見すると言わざるをえない。とはいえ、写本等の原本が見られない者にとっては、アパラートゥス・クリティクスにのせる異文は貴重であることも確かである。以上の二著は筆者らの研究にとり充分に利用すべきものである。

(3) 同時に、『サバの書』を中心として、『オストロミール福音書』、『アルハンゲリスク福音書』、『ムスチスラフ福音書』のそれぞれを四福音書での章節順に並べ替えた、平行テキストの作製を行う。

4. 研究成果

(1) 1995年度以来の研究の積み重ねにより、アプラコスとしての重要な構成要素たる synaxarion や menologion について有益な知見が得られている。それらを踏まえて、まず、『ヴァチカン・パリンプセスト・キリル・アプラコス』(VP) を『オストロミール福音書』(Ostr) などと比較対照し、synaxarion や menologion について文献学的な考察を行った。その結果、①VPの底本は、グラゴール文字で書かれた複数のアプラコスである可能性が高い。②VPの synaxarion は、その構成上、スラブでのアプラコス編集史の上で、草創期に位置すると考えられる。③VPのインキピットに関連して、特異な例が見られる。④menologion において、Ostr との間に差異が

存在する。⑤VPの menologion には、日付け、祝祭対象、インキピット等に関して誤認や記事の不統一が見られ、これは、VPの menologion が、東西ブルガリアにおける menologion 編集の完成へのプロセスの中で、整理・改新をも含めて、その途上に位置する作品であった可能性を推察せしめる、などの諸特徴が判明した。

(2) ついで、『サバの書』(Sav) を対象として、synaxarion や menologion について文献学的な考察を行った。その際に、Sav は、従前のように古代教会スラブ語のカノンである Sav 本体のみではなく、やや後のロシアやブルガリアで作られた写本をも包含する「とり合わせ本」として全体で1冊のアプラコスをなすコーデクスNo.14 を研究対象とするなどの特徴的な新たな試みを行った。得られた結論は次の4点である。①Kniazevskaia らの刊本で列挙される menologion に認められる日付に関して、漏れや誤りがあることを確認した。②synaxarion の部分のみの研究では、「ペンテコステ後第17土曜・日曜」は設定されていなかったとも見えるが、menologion との統合的な考察によれば、設定されていたと考える。③このペンテコステ後第17土曜・日曜が設定されていたか否かの問題は、筆者らの間で意見が分かれた。従来の学説、他写本での状況、そしてなによりも『サバの書』内部の構造、物理的スペースの問題等々勘案したが、結論としては、どちらの可能性もあると考え、ペンディングとしたことを特記する。④「主日の早課十一の福音」は『アッセマーニ写本』、『アルハンゲリスク福音書』(Arch)、『ムスチスラフ福音書』(Mst) と同様に menologion の後に配されている。これに対して Ostr では、synaxarion と menologion の中間に配される。⑤コーデクスNo.14では、さらに写本末尾にアポステルの聖務日課とみられる Heb 3. 1-4 を含む半葉が付加されており、きわめて興味深い(この葉は11世紀ブルガリア制作にかかる)。

(3) 別の観点による成果を述べる。①スラブ語典礼はビザンツの典礼改革・拡充を踏まえて、その拡充がなされた。その例は1092年成立の『アルハンゲリスク福音書』に見ることができる。ここでは従来のスラブのアプラコスよりも、たとえば受難週間での祈祷の回数が増加している。こうした拡充は、Tixomirov の指摘「受難週間での礼拝回数の増加に伴い、新しい礼拝のために読むべき福音書の抜粋箇所不足も生じた。このような足りない箇所は、おそらくシメオン帝治世のブルガリアで現われた新しい編集による四福音書の翻訳(東ブルガリアのテトラ(四福音書)から抜粋された)が、その拡充の本質を語っているが、その通りであろう。②これを具体的に調査してみると、従来からの祈祷の箇所では、機械的に写すのではなく、

取捨選択し、編むという操作を加えながら、従来からのペリコーペを十分に活かし、他方新たに拡充された祈祷の箇所では、従来からのテキスト群に加えて、新たな世代の写本群をも踏まえた編集になっていることが認められる。J12. 19 と J12. 40 を例にとる。J12. 19 で Ostr ではアオリストの新しい形態が出、Arch では OCS の標準テキストの四福音書やアプラコスではなく、シメオン帝治世ブルガリアに出現した新編集の翻訳からの影響が明白に認められる。J12. 40 では、Ostr、Mst、Arch は標準テキストである『アッセマーニ写本』とほぼ同様であるが、興味深いことに、Arch ではコンピュータが用いられていず、ロシアらしい書き方になっている。しかし一方では、ブルガリアの『ドブロミール福音書』（12世紀）は Arch に同じく、『バニツァ福音書』（13世紀）には依然コンピュータが存するという具合に、新・旧それぞれのテキスト系譜上にあるという事実も存する。Zhukovskaia の指摘通り、すでにキエフ・ロシアにおいては、写本作成時にブルガリアから将来された新旧多数の原典が参照されたと考えるのが、至当であろう。そしてここでは、種々の、各地に適合した動詞形態—アスペクト・時制・接頭辞の有無等々の変更を含む—を第一とし、他の語彙にも波及し表出されているのである。

(4) これらの研究により、Ostr、Arch、Mst のアプラコスとしての構成に注目すると、三写本の中で成立年代が最も古い Ostr が、当時の最新のブルガリアのアプラコスにならうことによって革新的であること、拡張型アプラコスの成立と発達に関する Zhukovskaia の諸論と主張は再考されねばならないこと、なども明らかになった。

(5) このような文献学的な研究と同時に、Sav を中心として、Ostr、Arch、Mst のそれぞれを四福音書での章節順に並べ替えた、平行テキストの電子的な作製を開始し、まずマタイ伝を試作品として種々の検討を行った。年度末までにマルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝についても完成させた。『アッセマーニ写本』の取り扱いをどうするかが問題となったが、技術的・時間的な困難さもさりながら、西ブルガリアの同写本よりも東ブルガリアの Sav に焦点を当てるべきという観点から研究に取り組んだ。最後に、2013 年度末に、冊子体の報告書 (iii+173 ページ) を刊行して関係各位に配布した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

① 岩井 憲幸、ロシア国立文書館所蔵コードクス No.14 の本文構成 —menologion を中心と

して一、『明治大学教養論集』、査読無、497号、2014、1-28

② 服部 文昭、Об инновации в составлении Остромирова евангелия,

”Comparative and Contrastive Studies in Slavic Languages and Literatures. Japanese Contributions to the XVth International Congress of Slavists”, 査読無、2013、1-9

[学会発表] (計 3 件)

① 服部 文昭、On three significant Russian lectionaries, 15th International Congress of Slavists, 2013 年 8 月 22 日、ミンスク言語大学 (ベラルーシ共和国)

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩井 憲幸 (IWAI Noriyuki)

研究者番号: 60193710

(2) 研究分担者

服部 文昭 (HATTORI Fumiaki)

研究者番号: 80228494

(3) 連携研究者

()

研究者番号: